

アフリカ文学と Oral Literature (9)

— サラ・ガートルード・ミリン、循環する声 —

赤 岩 隆

【要旨】 前回論じたポーリン・スミスと同時代の南アフリカの女流小説家サラ・ガートルード・ミリンを取り上げ、その「血の物語」とも呼ぶべき特異な小説作品を詳細に分析する。それを通じて、作家の著作と並行しながら成長してゆくアパルトヘイトとの関係を論じ、また、それによって示唆される、小説における orality の可能性を探る。

1

前回取り上げたポーリン・スミスと同時代の作家のひとりに、サラ・ガートルード・ミリンがいる。寡作だったスミスとは対照的に、長年に亘って筆を執り続け、数多くの作品を残した南アフリカの女流小説家である。ふたりのあいだには、手紙のやり取り等交流が認められるが、ミリンはスミスとは違い、早々と結婚もしたし、なにより南アフリカにとどまり続けた。もとを質せば、リトアニアからのユダヤ移民である。生まれるとほぼ同時に、両親に連れられ、南アフリカに移り住んだ。1889年のことである。家族は、ダイヤモンドで有名なキンバリーに近いビーコンズフィールドに落ち着くが、5年後には、さらに奥の採掘場へと引っ越して、ユダヤ移民らしく、そこで商店を営んだ。以後、ミリンはキンバリーとその周辺で大きくなることになる。

ポーリン・スミス同様、ミリンも、南アフリカに住む人たちに執拗な眼差しを投げかけた作家だが、その眼差しの有り様は、まったく性質の異なるものだった。そのことは、寡作と多作、住まいを南アフリカから外に移したか否かという違いとも、深く関係している。南アフリカで生まれ育ったスミスが南アフリカを去り、移民だったミリンがそこから離れなかったというのは、なんとも皮肉な成りゆきだが、そうした方向性の相違が、ふたりの小説の質や、あるいは、その後の作品数まで決めてしまったとしたら、ただの皮肉では済まされないだろう。前回、前々回の議論が示すとおり、ポーリン・スミスは、南アフリカと、とりわけそこに住むアフリカーナたちに対して、ノスタルジックな後ろむきの視線を投げかけたわけだが、サラ・ガートルード・ミリンという作家は、それとは反対に、いわばアパルトヘイトの萌芽とともに誕生し、その意味ではまさに前向きに、巨大化複雑化してゆく制度に寄り添うようにして、着実に仕事を積み重ねていった。御用作家とまでは云わないにしても、少なくともアパルトヘイトの成立と一心同体だったようにみえないこともない。そうした作家の足跡を辿りつつ、あわせて oral literature との関係を考える。それが本稿の目標である。

2

サラ・ガートルード・ミリンも、ポーリン・スミス同様、論じられることの少ない作家だが、

ふたりよりはるかに有名な、同じく南アフリカの小説家であるJ.M.クツェーが、自著『ホワイト・ライティング』のなかの一章をとくにサラ・ガートルード・ミリンに割いている。ミリンを論じたものとしては、その文章がもっとも便利であり、かつ優秀でもあるので、まずはそれに拠りながら議論を起すことにしよう。

“Blood, Taint, Flaw, Degeneration” というのがその章のタイトルである。羅列された単語が示すとおり、そのおおよその内容は、稚拙な遺伝学、誤った社会進化論を鵜呑みにした時代と作家ミリンとの関係を論じたものである。いうまでもなく、それら疑似科学は、なによりナチス・ドイツにより喧伝されたものであり、また、アパルトヘイトを産み育ててゆく重要な基盤のひとつとなったものだが、ミリンは、あたかもその動きに荷担するかのよう、作品を書き綴っていった。といって、いまさら告発するのがクツェーの目的ではない。いわゆる「ホワイト・ライティング」なるものを南アフリカにおいて構成する、その一側面を文章に直しとどめておくというのが執筆の動機だからである。「時代遅れ」という形容が、文中なんども使われているが、ナチス・ドイツの崩壊とともに、それら疑似科学は最終的に棄てられることになったという歴史的経緯からすれば、たしかにそのとおりである。ましてや、それら疑似科学に対するミリンの荷担の度合いを考慮に入れるなら、時代の進行とともにその作品についてもふり返られなくなるのは、ごく自然な成りゆきと云えるだろう。だが、oral literature をめぐる本稿の目標からすれば、話は自ずと別になる。「疑似」あるいは「時代遅れ」なればこそ、意味がある。いわゆる orality の問題が、そうした次元においてこそ、もっとも特徴的に現出するものだということは、ほかでもない、ポーリン・スミスをめぐる議論からも明らかなおとりだからである。その意味では、逆に、まさに議論の最前線と云えないこともない。

本稿において想定されているのは、次のような、ごく単純な機制である。すなわち、キンバリー（この地名を忘れないでおこう）とその周辺で暮らしながら大きくなったミリンは、当然のように、巷間に広まるもろもろの疑似科学を、多くは口伝で吹き込まれつつ成長し、また、作家となる際には疑いもなくそれを採用した。むしろ矢継ぎ早に書かれた諸作品は、自然な結果として、彼女を育てた口伝の疑似科学をよりいっそう強化することになる。そうした口伝（＝声）をめぐる循環は、作者の執筆をさらに促し、かくて両者は互いに補強し合いながら、一方においては、何十年とかけてそれら疑似科学の支持のなかアパルトヘイトという法制度が整備され、他方においては、半世紀に及ぶ長い作家人生と数十のタイトルから成る長い作品リストが残されることになる。いうまでもなく、「口伝で」というのが、この想定されたメカニズムのポイントである。ようするに、ミリンの仕事も、アパルトヘイトのそれも、肝心要の部分は、その次元においてなされていた。その次元の支えなしには、いずれの仕事も成り立たなかったということなのだが、そんなふうにも、oral literature（あるいは、orality の機能）は、現代のアフリカ文学の成立に寄与し得る。そう云いたいのである。

とするなら、ネガティブというのが、本稿における議論のそもそもの特徴である。あるいは、オブセシヴという言葉を使ってもよいのだろうが、これらは、奇妙にも、ポーリン・スミスにも当て嵌まるキーワードだった。ポーリン・スミスとサラ・ガートルード・ミリン、ふたりの違いはうえにまとめておいたとおりだが、そうした明らかな相違があるにもかかわらず、この「ネガティブ」、「オブセシヴ」という点で、ふたりはじつによく似ている。結果、あたかもふたりは、時代や制度の同じ犠牲者であるかのようにもみえてくる。一方はひっそりと、もう一方はこれ見よがしに積極的だが、ふり返ってみれば、ともに同じ席にすっぽりと納まって

いる。そんなふうにもみえてくる。

3

最初に書いたのは、『暗い川』(*The Dark River*, 1920)である。31歳、すでに結婚し、ジョハネスバーグに住んでいた。それ以後1968年の死のときまで、ほぼ半世紀、サラ・ガートルード・ミリンは、途切れることなく作品を綴り続けてゆくことになる。同時にその間、国内においては、南アフリカ史上もっとも密度の濃い諸事件が、世界規模の二度の戦争の悪夢と並行しながら、克明に刻まれることにもなる。キンバリーではじまった差別政策の萌芽は、年を重ねるごとに成長してゆき、やがて悪名高いアパルトヘイトとして実を結ぶ。作家にとっても、最大の転機となったのは、もちろん、国民党政権が成立した1948年という年である。アフリカーナにすれば、悲願とも云える政権奪取だったが、これを機に、作家は問題作をふたつ発表する。『混血児の王』(*King of the Bastards*, 1949)と『魔法の鳥』(*The Wizard Bird*, 1962)のふたつである。処女作が1920年の出版だということを考えると、なんとも息の長い作家だが、そうした長い経歴に対応するのに、本稿においては、大まかに国民党政権成立の前後に分けて作品を論じたいと思う。したがって、今回は国民党政権の成立以前、とりわけ初期の作品に注目する。より具体的には、処女作『暗い川』と、作家がそれによって自らの地位を確立した『神の継子たち』(*God's Stepchildren*, 1924)の二作品である。

まずは、『暗い川』のほうから、あらずじを掻い摘んでみておこう。舞台は、ダイヤモンド採掘場とキンバリー、ケープタウン及びその周辺、そして、ジョハネスバーグである。時は、1902年。イギリス人ジョン・オリヴァーは、ボーア戦争に志願して南アフリカまで来たが、着いたときには、戦いは終わっていた。そのまま帰国すればよいものを、オリヴァーは、仕事を求めてダイヤモンド採掘場のひとつロスト・ホープへと流れてくる。それが墮落の始まりで、2年もしないうちに、近くのロケーションに住むカラードの女と交わり、混血の娘をもうける。それが禁断のふるまいだということは本人も自覚しているが、容易に脱出の望みは叶わず、混血児が次々と生まれてゆく。そして、12年。折しも第一次大戦が勃発し、それを好機と捉えたオリヴァーは、自ら志願して従軍することにより、採掘場の諸々と金輪際手を切ろうと考える。

ところで、この長篇小説には、もうひとつ別のプロットが絡んでいる。グラント家は、オリヴァーが流れ着くダイヤモンド採掘場の近くで農場を経営していたが、偶然にも、彼がそこでの生活をはじめると入れ替わりに、農場を畳み、ケープタウンへと越してゆく。グラント家には、娘が三人いるのだが、うへのふたりの娘が、引っ越すに際し、名残を惜しみに馬で採掘場までやってくる。その折、二番めの娘ヘスターはオリヴァーと言葉を交わし、合わせて肩に掛けていたカメラでスナップ写真を撮ってやる。それから12年して、戦場で脚を負傷しケープタウンに帰還したオリヴァーは、郊外の保養地ミューゼンバーグで偶然ヘスターと再会する。その後の展開は早く、オリヴァーはヘスターにプロポーズし、結婚した二人はキンバリーに移り住む。

姉アルマは、ヘスターとは違い、結婚相手に不自由しないが、いつまでも踏ん切りが付かないでいる。結婚相手としてもっとも適任とみえるのは、ジョージ・バックルだが、若い娘にはいまひとつぱっとしない男である。アルマは、不実なその友人レネ・ファン・リードのほうに

惹かれ、結果、二十代を無駄に過ごしてしまう。その間の10年、ジョージは健気にもアルマを想い続けるが、想いが通じ、アルマもついに折れかけた直前、そうとは知らずに末娘のルースと結婚の約束を交わしてしまう。

一方、口には出せぬ秘密を隠しヘスターと結婚したオリヴァーは、せっかく手に入れたダイヤモンドのバイヤーの仕事を失い、夫婦ともども、過酷な採掘場の生活へと舞い戻ってゆく。さすがにもといたロスト・ホープだけは避けたが、採掘場間に行き来がある以上、際どい立場に追い込まれたことは否定できない。案の定、長女が子守として採掘場にやってきて、ついに怖れていたことが起きてしまう。すなわち、その面影がオリヴァーに似ていることに気付いたヘスターに、隠し通してきた真相を読まれ、結果、洗い浚い告白せざるを得なくなるのである。ヘスターは、腹に子を抱えたまま実家へと戻り、オリヴァーは、自身の人生に見切りをつけようと、ふたたび戦場に身を投じる。

ヘスターは子を産み、看護婦の資格を取るにより、ひとりで生きてゆく道を模索する。そして、アルマが、生き直そうとするレネの姿に信じ得る真剣さを認め、それとの結婚を真面目に考えるところを伝えて、物語は終わる……。

サラ・ガートルード・ミリンの長い作家人生において、のちに露わになる傾向という点からすれば、登場人物のうちもっとも注目すべきなのは、いうまでもなく、禁断の行為に耽るジョン・オリヴァーということになるのだろうが、上記あらずじからも明らかなおり、ジョン・オリヴァーひとりだけが、いわゆる物語の主人公というわけではない。ということはつまり、オリヴァーをめぐるテーマのみが、物語の中心問題というわけではないことを意味する。それが証拠に、先に触れたクッツェーの論文においても、この作品についてはほとんど触れられていない。とするなら、本稿の目標からすれば、そもそもこの作品は場違いだったということなのか。クッツェーはそう考えたのかもしれないが、問題はそんなにも単純ではない。というのも、この長篇小説は、純粋に小説としてみた場合、(処女作にもかかわらず)、上々と云ってよい仕上がりになっているからである。とするなら、けっして独占的に主人公と云えるわけではないジョン・オリヴァーだが、それを中心とする物語もテーマも、なにを論じるにせよ、軽視できないことになる。もっといえば、そうした全体の仕上がり部分として無理なく貢献しているからこそ、ほかの作品からは汲み取れない意味の一端もみえてくるはずである。

4

サラ・ガートルード・ミリンのこの処女作を、純粋に小説としてみた場合、優秀と見做し得るのは、ひとえにその自然主義的とも云える書きっぷりに拠る。事実を事実として、可能な限り簡潔に書き記し伝えてゆく。それがこの際の方法の要諦である。採掘場、ロケーション、保養場、ジョハネスバーグ等々、場所はさまざまに移りゆくものの、それら描写は、いずれも作者の直接の経験に基づいていると思わせるものばかりである。逆を返せば、それから外れるものについては、同じく可能な限り、描写から排除されることになる。それが証拠に、たとえばジョン・オリヴァーが最初に従軍する際必要になる、南部アフリカにおけるドイツとの戦いの描写も、じっさい質量ともに劣る点で、ほかとは比較にならないほどである。ところが、このときオリヴァーは、ひとりの戦友の命を助け、それがもとでその父親から援助を受け、採掘人よりははるかに見込みのあるバイヤーの職に就き、一人前に結婚することもできるのだから、

それらのきっかけとなる戦場の描写については、もっと充実していて当然と思われるのだが、作者にすれば、いくら重要でも、直接経験していないことは書きたくない。とあって、プロットの進行上、これをまったく欠かすわけにもゆかず、結果として、現在のようなめだって不十分な取り扱いとなっているわけだが、そこまで作者が自然主義的な方法に対して徹底しているとしたら、なにを論じるにせよ、これがスタート地点とならなければならないだろう。本稿が問題視する傾向についても、同様である。すなわち、この作品における混血の取り扱い、(ほかの作品とは違い)、どのような悪意とも偏見とも、あるいは、どんな疑似科学とも、もともと無縁だった。そういうことになる。作者自身が住むキンバリーの近くにはダイヤモンドの採掘場があり、そこではうらぶれた白人の男たちが、一獲千金を狙って絶望的な生活を送っている。そうした者たちのなかからは、女不足という超え難い物理的な事情に負けて、半分は出来心からロケーションの女に手を出す不屈き者も出てくる。そのような自然な観察の結果が、ジョン・オリヴァーという人物であり、この男を中心とした物語の展開ということになるわけだが、それを云うなら、グラント家の人びとをはじめとした作中の人物造型は、けっして大袈裟な物謂いでなく、すべて自然な観察に忠実である。グラント家の三姉妹にしるミスター・グラントにしる、レネやジョージ・バックルにしる、あるいは、その他諸々の登場人物にしる、20世紀の冒頭に南アフリカに暮らす人間として適切さを欠く設定や描写のなされている者はひとりもない。

以上の議論が正しいとするなら、なるほどクツェーが自身の論文でこの作品を積極的に取り上げなかったのも無理はない。なぜなら、その論文で重要となるのは、どんな「自然」とも真反対な偏りにほかならなかったからである。とするなら、作者はこの作品に認められる方法を、一転して次作以降においては棄てたのか。もしそうなら、なにゆえそのようなことをしたのか。なんらかの答えを出さなければならない問題だが、それには少々時間がかかる。いずれにしる、ここではひとつだけ、次のことを確認しておこう。というのも、うえで述べた方法というのは、いわゆる文体に関するものであり、ゆえに、通常は容易に棄てたり交換したりできないものだからである。この文学の常識に従うなら、問題の方法は、自作以降も持ち越されたはずである。もしそうなら、どのようにしてそれは持ち越されたのか。これについても考えなければならないが、当面の課題としては、この先の議論に備えて、上記方法=文体がいかにかジョン・オリヴァー及びその物語に絡みつき、また、それらを根底から規定しているかみておくことである。

5

話を先のあらすじに戻すことにしよう。というのも、それには、先に触れた不十分すぎる戦場の描写同様、自然かどうか疑わしくみえる一件がほかにも含まれているからである。オリヴァーの唾棄すべき秘密を知ったヘスターは、当然にもその顔をみるのも嫌になり、採掘場を去り、実家へと戻る。だが、彼女の腹のなかには、オリヴァーとのあいだにできた子が宿っており、これまた当然のように、そのことが彼女を苦しめる。すなわち、そのように穢れた男と関係を持つことによって、自身の身体も腹のなかの子も、同様に取り返しようにも穢れてしまったに違いないと思ひ悩む。一時は自殺まで考えるものの、結局のところ、できてしまった以上、産むより仕方ないと諦める。出産後、ヘスターは看護婦として生きようと努め、赤子の世話

主として姉のアルマが看ることになる。当初は、「母性本能などない」とまで云っていたヘスターだが、月日が経つうちにその態度は和らぎ、最終的には、ごく普通の母親と変わらず、我が子を受け入れ、熱愛するに到る。

そのようにヘスターの態度はいわば豹変するわけだが、どのようにそれが具体的には起きたのか、欠落しているのはその詳細である。くわえて、この豹変ぶりは、それ自体としてみても、きわめて不自然とは云えまいか。もちろん、たとえばアルマが最初から赤子に対して平気であるように、そうした態度こそおよそ自然であり、ヘスターもその自然さを恢復しただけのことと考えられないこともないが、はたしてそれで本当にリアルと云えるのか。というのも、ここでのリアリティのレベルとは、たとえば終始寛大なアルマでさえ、戦場に出かけるオリヴァーが訪ねてきた際には、それと握手するのに明らかな嫌悪を示し、また、子どもを抱え立ち立ちをめぐすヘスターが、オリヴァーからアルマに託される金には戸惑うことなく手を付け、あるいは、政府から届く別居手当に対しても、自身と子どもの生活費に充てて躊躇ないといった、むしろ高度なレベルに属するものだからである。とするなら、少なくともヘスターの豹変ぶりについては、その詳細が提示されて当然だろう。でないと、作品それ自体がアンチ・クライマックスに墮してしまふ。

ようは、いかにも処女作らしく妥協した、そう考えるのがこの場合穏当なのかもしれない。じっさい、具体的な読書経験に即してみても、そうした妥協に大きな無理は認められない。ヨーロッパの戦場に去ったオリヴァーは、最後に一通別れの手紙を送ってよこし、ミスター・グラントは後添いを迎え入れて後顧に憂いなく、また、もっとも幸せに乗り遅れていたアルマにさえも、ようやく春が訪れようとしている。そうしたなか、ヘスターが、その子自身はけっして混血ではない息子を受け入れ、働きながらそれを育ててゆくことを決意する。そうした物語の展開になんの無理があるだろうか。

とするなら、この作品を優秀足らしめている原理こそ、ほかでもない、物語を丸く収めるという意味からすれば、一種の足枷になっていたと云えないこともない。そのなよりの証拠は、最後までぎくしゃくとした動きから脱することのできない二重のプロットである。一方は、オリヴァーの墮落に発しヘスターを巻き込み、他方は、アルマをネガティブな中心としながら、いまや採掘場から遠く離れ安楽な金利生活を送るグラント家の人たちのブルジョアらしい生き方を追う。キンバリーという接点を除けば、およそ相容れない両者だが、けれども、作者にすれば、かつてキンバリーとその周辺に身を置き、そこから都会へと脱出するというのは、自身経験した現実そのものである。現実的でないのは、採掘場へと逆戻りするヘスターの生きざまのほうにほかならない。その理由は、でないと二重のプロットが相互に絡み合わないからだが、とするなら、ここには明らかにフィクション＝不自然が存在する。くわえて、作者自身はその事実に気づきもしなかった。皮肉といえば皮肉な成りゆきだが、といて、作者に特徴的である自然主義の方法が、これでまったく嘘になるわけではない。それどころか、そうした方法にむかっての執拗な追求が、結果として、メビウスの輪よろしく、作者も気づかぬうちに自然を不自然へと転倒させてしまうのである。

ふたたびあらずじに戻ろう。ごく自然にも、オリヴァーとヘスターは物語の冒頭で出遭い、その際ヘスターは、持っていたカメラでオリヴァーの、盛り土のうえに颯爽と立つ雄姿を撮ってやる。その後2年して、問題の写真は、短い手紙を添えてオリヴァーのもとに送られてくるのだが、そのときにはすでに彼は絶望の縁に立っており、結果、その大事な写真を衝動的に破っ

てしまう。オリヴァーはすぐに思い返して破り棄てた写真を拾うと、慌てて裏から補修する。といて、いきなり覆水が盆に返るはずもなく、じっさい、その後すぐオリヴァーは奈落の底へと落ちてゆく。意義深くも、ここでも物語の冒頭同様、新たな展開（墮落）の開始を一枚の写真が記すことになる。話はそれだけでは終わらない。それから10年してふたりが再会する際、その結びつきをごく自然な形で保証するのまた、唯一、この即席に補修された写真のみである。再会後すぐにふたりは結婚し、物語は、うえて縷々説明したとおりの展開を示すわけだが、ようするに、二重のプロットが絡むその基点には、じつに心細い話にも、つねにこの一枚の写真のみがへばり付き、全体の支えとなっているのである。といて、その小ささや心細さは、それに与えられた役割をけっして裏切るものではない。というも、およそどんなリアリズムも、そうした矮小ともみえる細部によって有効に支えられてこそ、はじめて機能するものだからである。その詳細を知るには、じっさい作品を読んだうえで体感してもらう以外ないが、いずれにしろ、それら場面の醸し出すある種の美しさには、間違いなく一級品と納得できることだけはここで保証しておく。

かくて、メビウスの輪のごとき転倒は、あくまでも自然主義的な方法に忠実なまま継起する。また、それゆえにこそ、転倒それ自体に対する反省は一切行なわれないうまま、二重のプロットはぎくしゃくと結末にむかって進んでゆくことにもなる。といて、そうした事実は、この作品の優秀さを少しも否定するものではない。というも、そもそもの事の起こりとは、本稿の些か偏ったアプローチに発するものと云えないこともないからである。それとは関係なしに作品を読むならば、20世紀はじめの南アフリカ及びそこに住む人たちの生活をときに鋭く描き出した物語として、ごく普通に満足しながら読めるはずである。結果、なおのこと気になるのは、先に提起しておいた方法的遺棄の（不）可能性の問題である。それを解くためにも、取り急ぎ、次の作品『神の継子たち』に進むことにしよう。

6

『暗い川』同様、まずはあらすじからはじめたいが、そのまえに作品の構成を確認しておこう。『神の継子たち』は、2部から構成され、第2部が4つのセクションに分かれている。それぞれ表題が付けられていて、第1部のタイトルが「先祖 (The Ancestor)」、第2部が「混血 (Mixed Blood)」、第2部の4つのセクションが、順次、「第一世代・デボラ (1824)」、「第二世代・クレインハンス (1842)」、「第三世代・エルミラ (1872)」、「第四世代・バリー (1890)」といった具合になっている。これをみても解かるとおり、じつに意図的な作品と云ってよい。そして、その想定される作者の意図が、さまざまに物議を醸すことになるのだが、上記構成をみれば、それも無理ないことと誰にも容易に想像がつくはずである。すなわち、先祖が混血の過誤を犯し、続く世代がその煽りを食らう。もちろん、遺伝を意識した作品である。しかも、その意識は、作品のタイトルに使われている「神の継子たち」という言葉が示唆するとおり、甚だネガティブな色合いを持ち、ゆえに、この作品は、『暗い川』とは違い、クツヴェーの論文においても議論の主要な対象となっている。

先祖というのは、牧師アンドリュー・フラッドのことである。物語は、そのフラッドが布教のため南アフリカにむかう船中のシーンからはじまる。所属する伝道団から指定されたのは、最奥の布教地であり、純粋なホットントットが小さな村を作っている。当然のように、フラッ

ドは布教に悪戦苦闘し、最後には村の娘と結婚し、子どもをもうける。通常あり得ないような結婚を決めたのは、神のまえには白人も黒人もないことを証明し、布教を進めるためである。と云えば聞こえはよいが、彼にも『暗い川』のオリヴァー同様の人間的弱さがある。ようするに、ホッテントットとの結婚とは、そうした弱さの結果と取れないこともない。

生まれた子どものうち、長女のデボラは、ボーア人のハンス・クレインハンスと関係を持ち、一子クレインハンスを産み落とす。クレインハンスは、同じくカラードのレナと結ばれ、3人の子をもうける。長女のエルミラは、父親クレインハンスの主人である農場主リンゼルに見初められ、その後妻に納まる。けっして若くないリンゼルだったが、エルミラとのあいだには、息子バリーが生まれることになる。

以上が300ページを超える小説のあらすじだと云えば、随分と乱暴な話になるが、悪いのはこちらではない。というのも、上記作品の構成をまさに裏書きするように、ほかでもない作者の書きようが、重要なのはそうした親子関係の骨格だけといったようなものだからである。抜けているとしたら、子どもが生まれるたびに变化する肌の白さについてのみである。すなわち、デボラは半分だけ白く、その子クレインハンスは4分の3、エルミラはそれよりもさらに白く、バリーに到っては白人と見紛うばかりといった具合なのだが、そうした白さの度合いに従い、いずれの登場人物も、肌の白さ（あるいは黒さ）それ自体に、それぞれ人生を翻弄されることになる。ある意味、最初から答えは決まっている。ようするに、ひとたび混血の罪に犯された以上、如何ほど世代を重ねようが、けっして救われることはないということ。とするなら、デボラからエミールに到るまでは、所詮、途中経過にすぎないことになる。理屈のうえでは延々と終わりなく続くはずのモチーフには違いない。だが、片や現実問題としては、どこかで物語を切り上げざるを得ず、そこで仮に終わりとして選ばれたのがバリーというわけなのだが、とするなら、ここでひと際重要なのは、そのバリーということになる。バリーをめぐる結末がどうなるか、それをみななければならないだろう。

7

「白人と見紛うばかり」のバリーだが、その彼とて、その他混血の先祖同様、問題が解決されているわけではない。というのも、ここでの血の問題とは、100パーセント純粋でなければ意味がないからである。大学で勉強するため、バリーは父親の母国イギリスへとむかう。牧師となった彼は、結婚し、妻ノラとともに南アフリカへと帰国する。ノラの腹のなかにはすでに子がいる。父リンゼルは疾うに死去しており、その死後育て親となってくれた年の離れた異母姉エディスにふたりは迎えられる。もはや白人気取りのバリーだが、南アフリカではそうはゆかない。100パーセント白人ではないというオブセッションが知らぬ間に甦る。それに心を蝕まれたバリーは、自分の血にはホッテントットの血が混じっていることを妻に告白する。そんな折、バリーのもとに手紙が届く。母親が重い病気になっているとの報せである。バリーはひとり旅に出る。先祖オリヴァー同様、奥地にむかう遠い旅である。違うのは途中まで鉄道が通っていることくらいのもので、それからあとは昔同様馬車でゆく。待っていたのは、祖父母クレインハンス夫妻、叔父アドニス夫妻とその子どもたち、病に伏せる母エルミラ。それと、驚いたことに、最初の混血である曾祖母デボラまでが、自身にとっては孫のエルミラとともに死の床を並べていた。なおも欠けている者は大勢いるが、まさに一族郎党集まった形である。もち

ろん、これには作者の意図が強く働いているはずである。それが証拠に、この旅が長い物語（道程）の最後を構成するという。また、最初の先祖オリヴァーと、その血統が世代を重ね行き着いた先のバリーというふうに、ふたりの人物をめぐって間違えようのない円環的な重複が存在するという。くわえて、その場には、全体に一本筋を通すように最初の混血デボラまでが顔をみせている。文字通りの大団円というわけだが、重要なのは、その末にバリーがひとつの結論に到るということである。バリーに焦点を当てて、物語をもう少し詳しくみてみよう。

旅に出る決心をすることは、この場合、妻ノラとの関係が断たれることを意味する。バリーの秘密を知ったノラは、唯一将来性を見込める選択としてイギリスへの帰国を主張するものの、バリーはそれに同意しなかったからである。単純に云えば、イギリスよりは南アフリカのほうを取ったことになるが、それは同時に、白人の血を棄て去ることを意味する。そこで思い出すのは、彼なりに不退転の決意を胸に南アフリカへと赴き、混血のうちに身を投じる先祖アンドリュー・フラッドのことである。むろん、両者のあいだに違いがないわけではない。先祖フラッドには最初から強い結婚願望があり、じっさい作品冒頭、船のなかで知り合った娘を見初め結婚を申し込み袖にされるといった茶番があるのだが、バリーの動きは、これとはまったく逆である。物語を起動させる役割を担う先祖と、それに一応の結末を付けなければならぬ末裔との違いと云えばそれまでだが、このことは、両者のあいだの円環的な重複がただの先祖返りではないことを強く示唆している。いわば先祖からの一筋に続く血統は長い年月をかけてそれだけ成長を遂げたとも云えるわけだが、重ねた世代の数を勘定に入れるなら、少し大袈裟な物謂いをして、「進化」と呼んでも差し支えないのかもしれない。それが証拠に、ふたりはひとつのもっとも重要なキーワードを共有している。曰く「自己犠牲」というのがそれなのだが、当然のように、細かく云えば、ふたつのそれは似て非なるものと見做し得る。大雑把に云えば、フラッドのそれはネガティブ、バリーのそれはポジティブな本質を持つということ。好んで身を滅ぼすことを弱々しく自己犠牲と呼ぶのと、神をめざすため身を棄てることを勇ましくも自己犠牲と宣言するのと、そのあいだには天と地の開きがあるだろう。これが、バリーの（物語の）辿り着いた結末でもある。

では、バリーは、そうした自己犠牲を決意することによって、肌の白さ（黒さ）に対するオペレーションを乗り越えられたのか。もしそうなら、少なくともそれだけみれば、たとえばクツェーによって散々叩かれながらも、この作品の終わりようは、じつにハッピー・エンドと見做せそうだが、はたしてそのことと、もともとの血の問題とは矛盾しないのか。あるいは、クツェーはじめ批評家によるこの血の物語の読み方は、どこか根本的に間違っていたことになるのだろうか。考えねばならないことは、なおも幾つも残っているようである。

8

それにしても、この作品において、物語の結末とは、そもそもどれほどの意味を持っているのだろうか。直面しているのは、バリーにしる誰にしる、けっして乗り越えることのできない遺伝の問題である。ようするに、誰がどう足掻こうが、結末だけは最初から決まっている。ここでの問題とは、本質的にみて、永遠に続く終わりのなき性質のものであり、じっさいバリーで物語を終わらせるどんな道理も最初からありはしなかった。つまり、この作品の物語の結末と

は、便宜上のもの以外の何物でもなく、その意味では、バリーもほかの先祖同様、ただの途中経過でしかないのである。

とするなら、バリーが自己犠牲を決意することによってオブセッションを乗り越えたかどうかなどと考えても意味のないことになる。彼の決意は、人間的な心情に照らしてみれば、立派で素晴らしいものかもしれないが、にもかかわらず、遺伝の問題は、それとはまったく関係なしに存続し続けるからである。あたかも、なにかあろうと、明日も明後日も東の地平線から無表情に昇る朝陽のように、である。と、ここで思い出してよいのは、そうした厳しさ（非情さ）とは、文学のいわゆる自然主義が目途としたものではなかったかということである。もしもそれが正しいなら、先に留保しておいた文体をめぐる問題についてもいまなら応えることができる。すなわち、『暗い川』から『神の継子たち』へと移行することによって、作者は、前者の文体を些かも遺棄・変質させるような真似はしていないということである。『神の継子たち』を執筆するサラ・ガートルード・ミリンの筆は、『暗い川』のときと同様、あくまでも自然主義の方法に忠実なままだった。そのことを、作品に添いながら、いま少しみておくことにしよう。

意義深いことに、1821年というのが、物語の第一行めに明記された年号である。それが意義深いのは、二重の意味に拠る。ひとつは、その前年イギリスから南アフリカへと大量の移民が到着し、結果、イギリス人移民と土着のボーア人とのあいだに軋轢が激化し、ひいては、30年代の有名なグレート・トレック、あるいは、その先の熾烈なボーア戦争の戦火へと通じるまさに口火が切って落とされたということ。うえて指摘したとおり、どこまでも自然主義の文体に忠実な作者だということを思えば、その意味から歴史的事実に対しても、同様に忠実であって少しも奇怪しくない。歴史的事実に拠れば、移民と同時に、伝道活動も盛んになり、結果、アンドリュー・フラッドのような人物も出てくるわけだが、してみると、アンドリュー・フラッドは、ただの登場人物ではない。虚構を超えて、ひとつの歴史を担っている。しかも、このことは、なにもフラッドひとりに限られたことではなく、おそらくは登場人物全員に云えることである。たとえば、歴史という点からすれば、無も同然のデボラだが、彼女がその種を宿すハンス・クレインハンスは、グレート・トレックの一員に違いないし、また、彼女と息子クレインハンスが身を寄せるアダム・コックを首領とする混血の集団、ないしは、彼らが造るグリカランド・イースト、あるいは、農場主となったクレインハンス一家をどん底に突き落とす1896年に流行した牛疫等々、どれもこれも歴史に言及できないものはない。

とするなら、『神の継子たち』という作品は、間違いなく歴史小説である。これを基盤に、証明するのに数世代を要する遺伝の原理が自然と重なる。すなわち、そうすることによって作者が憬れていたのは、いわば血の大河小説と呼ぶべきものだったはずである。その意味からすれば、バリーを中心とする物語の結末は、あれで正しかったとも云えるだろう。およそ百年に及ぶ大きな物語である。それに対して下すバリーの決心は、センチメンタルという弱みもすべて含めて、文学的に相応と見做されて当然だが、にもかかわらず、厄介なことにも、これで話が終わるわけではない。というのも、ほかでもない、たとえばクツェーのような批評家から執拗に否を突き付けられるという事実があるからだが、そうなるのもそれなりの理由がないわけではない。なぜなら、そうした否をある意味正当化する疵をたしかに作品が抱えているからである。ここで云う疵とは、すなわち、作者があくまでも忠誠を尽くす自然主義的方法である。そうしたやり方が本質的に備える非情さについては、先に指摘しておいたとおりだが、その所

為で、自ら隙を作り非難を浴びる。隙が出来るのは、観察の結果に一切口実を設けないからであり、そうしなければならなかったのは、それでこそ自然主義的と呼べるからである。

9

思えば、「放置」というのが、ここでのひとつのキーワードのようである。それゆえにこそ、作者は登場人物の誰がどのような窮地に陥ろうとも一切救いの手を差し伸べようとししない。ようするに、作者は物語を少しも作ろうとしないわけだが、この点唯一の例外は、先にも述べておいたように、物語の結末だけである。してみると、不思議にも、この作品においては結末それ自体にはなんの重要さもなく、意味を持つのは、むしろ個々の途中経過のほうだということになる。だが、それら途中経過は、ほんとうに正しかったのか。これに真正面から噛み付いてゆくのがクツェーラ批評家たちである。たとえば白人の血がホッテントットのそれと交わることは、真に怖れるべきことなのか。作者の冷静な観察によればたしかにそうなるのだが、くわえて、そうした作者の観察に、ほかからの援護射撃があったとしたらどうだろう。援護射撃の出所とは、たとえば、本稿冒頭でも触れた遺伝学や優生学である。ここでポイントとなるのは、とりあえずは、作品の出版年 1924 年ということになるだろう。その時点での遺伝学や優生学、とりわけ後者が一般的にみてどのようなようになっていたか、以下に若干の復習をしておこう。

いわゆる優生学が、正しくも、進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンの従兄弟であるフランシス・ゴルトンに端を発していることは、夙に有名な話である。曰く「適者生存」、曰く「自然淘汰」というのが、この非情な理論の骨子である。種を進化させる（あるいは、退化させない）ためには、優秀な構成因子を残し、劣悪なそれを排除する。この点人間も動物も変わりはない。じっさい、無力な社会改良などに頼っている場合ではないというわけだが、このじつに直接的な進歩思想は、時流にも乗り、ヨーロッパの国々、アメリカへと広まっていった。やがては国際的な学会もでき、理論に理論を重ねた果てには、それを実現させる実際的な方法として、断種が考えられ、具体的にそれに手を染める国も出てくる。そうした発想からすれば、いわゆる福祉は悪である。なぜなら、それによって本来なら絶えるはずの劣悪因子が生き残ることになるからである。同様に戦争も悪とされたが、その理由は、それによって優秀な遺伝子の持ち主が積極的に前線へと赴き、その遺伝を途絶えさせ、逆に、後方に残った劣悪因子が訳もなく生き残り、子孫にその遺伝子を伝えることになるからである。

福祉も戦争も同様に悪だというのは、まったく驚くべき話だが、適者生存・自然淘汰というのが理論として正しいとされ、くわえて、そうした理論に人工的かつ積極的に関与するとするならば、断種の考え方も同様、正論と認識されてむしろ当然だったろう。だが、断種を敢行するとして、いったいなにを以て、ある種の構成因子を絶対的に劣悪と見做すのか。曰く常習犯、曰く薬物・アルコール中毒者、曰く精神異常者がそれというわけだが、一見もっともらしくみえる、そうした枠組みこそ怖ろしい。なぜなら、それによってはけっして独断の限界を無化することができないからである。断種はつねに正義の名のもと極悪な私刑に墮する可能性に晒されている。じっさい、ナチス・ドイツがユダヤ人相手にそれを行なったように、である。正義とは、すなわち、古来より権力者により行使されるものと決まっているが、とするならば、権力を持たぬ者の遺伝子とは、絶対的に劣悪なのか。悪しき優生学に従うならば、そう見做されて当然だが、とするならば、単純にも、勝者こそ善だということになる。いうまでもなく、そうした

考え方から、たとえばホッテントットと白人が交わることを悪とする考え方までの距離は、無きも同然と見做し得る。すなわち、ホッテントットの遺伝子が真に白人のそれに劣っているとは誰にも証明できないが、結果だけみれば一目瞭然だといったふうに、である。ようするに、すべては結果がある特定の遺伝子を絶対的に正当化する。ここで口を開けているのは、人類にとってあまりにも怖ろしい陥穽と云ってよい。哀しくも、時代がそれにすっぽりと陥り、そこから抜け出るのに、じつに一世紀の時間を要したというわけである。

以上のような経緯を辿る考え方は、『暗い川』が世に出た1920年の時点よりも、『神の継子たち』の1924年のほうが、わずか4年の違いだが、より「進歩」していたはずである。ドイツで云えば、なによりも福祉を標榜するワイマール共和国がすでに動き出していた。優生学にとっての福祉がどのように見做されたかについては、うえにまとめておいたとおりだが、その優生学がワイマール共和国に根付き、平和と断種が同等のように論ぜられ、このことがのちのヒトラーの出現を着実に準備してゆくことになる。強者の論理に支えられ、偏見は偏見を平気で産み、それを止めることはもはや誰にもできない。とするなら、不平等が日常であり、なにより混血がさかんに行なわれた南アフリカのような場所で、非情な観察を旨とする作家によって、『暗い川』や『神の継子たち』といった作品が書かれたのは、むしろ必然の結果と云ってよいだろう。すなわち、白人とホッテントットの血の交わりとは、文句なく、絶対的な種の退化を意味したのである。

10

サラ・ガートルード・ミリンが従ったのは、自らの観察に支持された当時の「常識」にすぎなかった。ごく単純な形式に基づく常識である。ひとつ、血は容易に穢れるものである。ひとつ、そうした血の穢れはどこまでも遺伝する。したがって混血こそ穢れのもとである。そして最後に、白人の血はホッテントットのそれと比べて絶対的に優っている。これらが作品を構成する唯一無二の原理であり、その意味では、まったくのところ作者に他意はなく、ゆえに誰からも非難される謂われはない。ようするに、作品において描かれているのは、誰の目にも否定できない現実それ自体に相違ないのだと。

むろん、現代の我々からすれば、クツツェーに教えられるまでもなく、そうした「常識」は一から十まで間違っている。だが、常識とは、そもそもその時代に固有のものではなかったのか。とするなら、時代の異なる常識に対して、あれこれ不平を述べ立てたところでどうにもならない。それらは歴史的意味を持つのみであり、可能なら、多くは反面教師的に学ぶべきなにかでしかない。とするなら、『神の継子たち』におけるサラ・ガートルード・ミリンは、隅から隅まで無実だったと云えるのか。じつに際どい疑問だが、これに関して気になる展開が物語に認められないわけではない。その展開とは、バリーとノラをめぐるものである。すなわち、ふたりの関係が破綻するのに先立ち、ノラはいっしょにイギリスに戻ろう、そうすればなにもかも問題は解決すると主張しバリーを誘うのだが、ようするに、ここでノラは、少なくともイギリスに生活の場を移すならば、混血の問題も安全に無化することができると、そう主張しているわけである。そして、この考え方は、残念ながらバリーによって一蹴されるわけだが、そうしたノラの主張を、見方を変えて作者の側に返して云うならば、自身の従う「常識」というものの根柢のなさを、その程度までなら作者も気づいていたと見做し得る。あるいは、その認

識まで、あと一步のところまで肉薄していた。にもかかわらず、ひとつには物語を丸く終わらせたい一心から、ノラの主張が持つ可能性の一端を探ることさえしなかった。このことは、明らかにサラ・ガートルード・ミリンの罪である。自ら信奉する、一切の口実を設けないという自然主義の方法にも反している。

あるいは、そこまで「常識」の持つ魅力が作者にとって強く作用したということなのだろうか。じっさい、あり得ない話ではない。ここで彼女の経歴をいま一度思い出して欲しい。すなわち、彼女は、もとを質せば、リトアニアからのユダヤ移民だった。結果、好むと好まざるとにかかわらず、差別全般に対して過敏にならざるを得ない立場にいた。いや、過敏な状態こそ、むしろ常態だったはずである。恐怖による過敏。それとは逆の怖いもの見たさ。この状態と魅了された状態とは、じっさい、紙一重には違いない。非情すぎる観察者も、ときに盲目にならざるを得なかったというわけだが、とするなら、ここでの問題とは、そうした常識の評価のほうである。それを最後にまとめておこう。

11

常識とは、多くは声によって構成されるものである。ましてや、複雑なメディアの発達していなかった当時のこと、勢い、それら声に頼らざるを得なかった。いずれにしろ、この声は、俊足をモットーとし、しかも、隅々まで伝播浸透する。一般的な噂の威力を思えば、容易に納得できるように、それは特有の説得力をも有し、誰しも常時それに晒されている。そのように簡単に逆らうことができないからこそ常識でもあるわけだが、そこまで考えるなら、サラ・ガートルード・ミリンが置かれていた立場も、推して知るべしだろう。一方、偏見とはどんな種類のものであれ、頑固このうえないものと決まっている。くわえて、作者は、類い稀な観察力に恵まれていた。それがいわば偏見を保証する。作者は、常識に、偏見に、天与の観察力に突き動かされ、筆を執る。といて、嘘偽りを書くつもりなど毛頭なかった。どの登場人物も、どの事件も出来事も設定も、微塵も現実を裏切るものであってはならない。その結果が、『暗い川』であり『神の継子たち』となって実現したわけだが、今度はそれら作品が、受けた恩恵を、常識=声の側に返す番である。そうした逆の補給がなければ、常識は常態を保てない。常識が常識でなくなってしまう。あるいは、ほかの常識に立場を乗っ取られることになる。この点、とりわけ『神の継子たち』は、補給の役目を十二分に果たしたはずである。ゆえに、クッツェーら批評家はこれに激しく噛み付いた。ようするに、彼らの非難の際の物謂いとは、作品が補給の役目を果たす際に広がる声それ自体と、ぴたりと重なっていたはずである。声に乗るのは、作者が重視した諸処の途中経過にほかならない。それらの実体とは、そのときどきの常識の羅列にすぎないが、同時に、それゆえにこそ、それはそれとして有効に機能する。全体的な関係や文脈からは完全に取り外されて、便利な部品よろしく、ほかの関係・文脈へと難なく装着されることになる。

かくて、常識=声と作品とは、一種の循環を延々と繰り返す。その過程で、両者はともに凝り固まってゆき、それぞれ独自の有り様を築き上げてゆく。まさに共存共栄というわけだが、この際、偏っていたほうが効率がよいというのは、皮肉な話には違いない。人類のひとつの不幸のはじまりと云えないこともない気がするが、なんにしろ、そうした機制に自ずと加担したサラ・ガートルード・ミリンとは、じつに不思議で特異な作家と云ってよいだろう。しかも、

この関係は、形を変えつつ、以後数十年間も持続されることになるのである。といて、本稿において詳しくみたように、サラ・ガートルード・ミリンという作家は、けっしてレベルの低い書き手ではない。そのことは、少なくとも『暗い川』、『神の継子たち』の二作品の分析を通じてすでに実地に証明されている。なにより、それらにおいて認められる自然主義的方法は、ほかのどの一流作家と比べても、芸術的に些かも劣るものではなく、また、それゆえ結果する文体の簡潔さも、ときに予想外に遠くまで届く射程の片鱗をみせてくれる。たとえば、バリーが一族郎党の待つ奥地をめざしひとり汽車に揺られてゆく際、知らぬ間に落ちてゆく黙想が示唆するのは、いわゆる意識の流れの描写ときわめて近いものと見做し得る。このことはまた、結末なき物語の結末をあり得るものとして読者に錯覚させる要因のひとつともなっている。すなわち、読者にすれば、そうした描写の深さが、バリーの人物としてのそれと知らずに同一視してしまうわけだが、本稿を終えるに当たって、その一端を以下に原文のまま引用しておくことにしよう。

As the train traversed the empty vastness of the land, the thoughts of Barry ran ceaselessly backwards and forwards from the past to the future. His ancestor, the Rev. Andrew Flood, had thrown away his white heritage, and for a hundred years at least one branch of his descendants had struggled to reach it again. They had ever diluted the blackness of their blood with whiteness until it was more white than black, until it was almost indistinguishably white, until there had resulted, in short, himself.

And he, again, had followed the family tradition and had married upwards, and his child... A spasm of terror passed over Barry Lindsell's face. His child. Nora's child. The vagaries of heredity. Who knew but that he, Barry, had made poor innocent Nora the vehicle of the vengeance of the Lord for the sins of the fathers? Who knew but that his child might be the sacrifice. His mind stood still for a moment, then began feverishly grinding out thoughts again. And yet it did not happen. And yet it might happen. And yet... Ah, what was God going to do with them all? (p. 304)

But he was able to understand these days how it was possible that his mother might not have been able to bear this marriage with a man forty-six years older than she was... He tried to think of her in terms of Nora. The same age as Nora she must have been when she ran away, and pretty too, as even Edith, in her grudging but honest way, was compelled to admit, very pretty.

He wondered what she looked like now, how she had passed all these years, what sickness it was that this Christina Kleinhans had so vaguely described in her letter. But he could not think of her as if she were really his mother. He was going to see her because he felt it to be his duty, but it was a duty he hated. It appalled him to realize that he, the Rev. Barry Lindsell a white man to all the world, was on his way now to identify himself filially with this coloured woman who had returned to die in the bosom of her coloured family---his coloured family! (p.305)

* 本稿において使用したテキストは下記のとおりである。

Sarah Gertrude Millin, *The Dark River* (La Vergne, 2010)

-----, *The God's Stepchildren* (AD. Donker, 1986)